

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black



上
三編

3077
7



3077
7

岩見美太郎
の事



叙

此書訂英担河亭主人の撰れども其を序ふ
余を頼子に作しし初編二編の稿を後
惜いふを被入を早く故人に教ふ合の意
先結主人より僕と云ふ頼子との月の中
之を以て後を以てし其の意を以て
之と友にがさし田中を以てし其の意を以て



余亦止やま今いま并ひと意いあらずと人ひと然しかりし折しる故ゆゑ
 何なにを究きむ所ところは法ほの法ほを結むすぶ事ことの類るい向むかひ
 高たかき事ことを此こゝ方かたに腹はらを揃ならせし折しる何なにれ
 一ひとつ折しる所ところは折しる所ところにありてあまの事ことに
 催促まゐり願ねがはれし事ことをさかす事ことの事ことの事こと
 之これを編あむ事ことは復また付つき事ことの事ことにほけみれど
 折しる事ことは本もととほぐ拙つたい事ことにほけみれど
 折しる事ことは別わかれし事ことにほけみれど

息いきし事ことは心こゝろを流ながす事ことに非あらず事ことの事こと
 之これを撰えらぶ事ことは心こゝろを流ながす事ことに非あらず事ことの事こと
 折しる事ことは心こゝろを流ながす事ことに非あらず事ことの事こと

折しる事ことは心こゝろを流ながす事ことに非あらず事ことの事こと
 折しる事ことは心こゝろを流ながす事ことに非あらず事ことの事こと
 折しる事ことは心こゝろを流ながす事ことに非あらず事ことの事こと

折しる事ことは心こゝろを流ながす事ことに非あらず事ことの事こと





幸次郎が妻
於八重

孝人

川崎
字
臺



樂し
を

幸次郎が
子
巳三郎

雀亀屋
幸次郎



立上る
誰か
おどろ
せと
皆戸
の

煙浦

雀
屋の養女
於柙



雀
屋
貞次郎

花鳥風月第三編卷之上

東都 梅亭金鶴編次

○
 切戸の果^{たまご}を在^までそ方^{ちやう}せ万^{まん}えまのまを^{あつ}かき^か
 首^{くび}をかぎて^か腕^{うで}をら^らこハテナ^ならう^らぬ^ぬひて^ひ来る^{くる}ま^まづ^づ
 何^{なん}指^{さし}ま^まらう^ら今^{いま}鳴^なる^るあが^あ長^{なが}糸^{いと}の^の入^い相^あら^らう^うと^とを^を
 と^と見^みる^るまの^の鼻^{はな}の^の先^{さき}を^を迷^{まよ}う^うと^と居^いる^るま^まは^は
 と^と入^い令^{れい}を^をま^まらう^ら例^{れい}の^の紙^しの^の一^{いっ}件^{けん}や^や何^{なん}も^もあ^あら^らう^う



よのや嘘とていざらうぐと名乗る洗む肩先と後
方のちまうらう殿りと打立て日と飛より一維ど何
奴ど人よ相うさせとこのハト振向て入て天宮とを
ていさといあう町の具形天う降う地う涌う
わめの子の心うまへ下魂げ顔一幸な手い見え
と笑ひながう「只今と入来このごちあが何うあ
アふ監へく居う降と脊中と打このサ「見さ
近う悲と仇たるをささう。エモシ何縁とらふ

隅田門でももう入相の縁が測君が姿もえ圍志ん
と心実屋よ維うもまぐまの法門へ出て廊の端
芝ふよのかりまの乳ふでうとをろと人志う縁のそ
のうらふ後方のもううう繞つて来て長命さの種
よりもまひく持まこの右の肩されたらちの初め
の法芽がえうう起つてまうの尻法たうこの右漢
とつう一度モシ返さひの魚やせんせ「エサ路うん乳
ぢやア「このごち「此方う一人で路ういあう「一世と

まてがらるるので、沙羅の地内は、自己の家の、お樹と
娘の乳母が居る、を処へ来て、其の、を、たき、
殺さ、い、ま、け、山、移、り、あ、ら、て、其、の、を、持、き、し、
何、指、さ、る、子、源、文、と、り、ま、し、
安事、は、公、用、と、を、破、却、ま、る、る、中、の、長、座、の、者、
の、母、親、を、お、け、ま、つ、け、て、親、ま、る、る、へ、今、夜、は、お、籠、り、
四、の、朝、の、又、つ、め、が、で、あ、ら、の、ち、や、ア、得、つ、て、お、あ、り、や、せ、ん、
唯、く、そ、ら、つ、り、有、が、一、つ、ま、し、
何、指、さ、る、

や、一、長、松、を、り、連、て、ま、る、が、今、笑、め、と、さ、せ、
ア、ム、子、を、処、で、下、足、お、ろ、と、復、つ、つ、ま、ア、老、も、角、も、
の、危、へ、ち、ら、と、お、出、
せ、る、の、も、乳、の、毒、ご、う、う、子、く、ま、ご、時、の、度、と、し、て、今、日、
ハ、毒、は、お、の、張、お、へ、出、り、け、や、う、う、何、に、卒、安、赤、肉、を、お、
持、り、や、ま、一、け、さ、ぬ、お、い、ま、さ、ぬ、も、お、持、り、
史、も、巨、志、の、と、し、て、
持、て、来、つ、て、先、方、を、お、ま、さ、る、と、ら、が、お、ま、さ、る、の、お、り、

の縫母さぬハもなまへおどりらふのハ世を思ふ飯の
名で矢法家政の跡を清さんといひ合ふら出さ
茶屋ちんく鴨の教多るあべでか徳のあて一社喰せら
まのお樂しことせけていふるあてを怪し算出して
来りまふかましくまの後りと乗しゆく上と一と
然るが突の急人のお孫らへ急先が四巻本内いさき電の
と先よ三腰をふめて可笑ま身振の幸法平へあや
五在「是サ乳の毒らりののま似をまふのど止る

呉ふといふまヨ「アハ」先ちうま酒目でサア世方へ
と切戸のちちへ入りて花石づくひ小歩のたを「五
モ不湯むうの面鏡で泉水流止なりあいの地りる
ぢやア世残へやせんう腐つくく成さう世とこそを
名やまが此極どふのるう向うをいそことろアヤロ
梅のたの透らる不一点と煙火がええやせう破かか
はまきあのを掃るあんと累釋ぢやア世残へやせん
女房のこえけいでもんよえつらねたれよとせよ

と何^えなる^{あやう}ほを^がえ^くま^らう^づま^らく^くれ^と性^{じやう}不^ふ
し^て石^{いし}焼^{やう}薪^{しん}へ^も実^{じつ}り^くわ^{やう}よ^かお^みせ^えし^じ
ト^あ庭^{てい}の^こ木^ぎと^らめ^ぐり^かん^ずが^あ居^まり^たる^あへ^出
ま^ばお^んず^の掃^えの^ねよ^もま^はり^びり^に風^{ふう}掃^{ほう}も
庭^にく^なる^への^あか^りか^りか^ん日^に本^{ほん}への
不^ふ実^{じつ}男^{おとこ}を^さけ^かく^まの^たお^のを^あら^せ何^{なに}庭^{てい}を^なま^すね
ま^らす^かの^あ方^{かた}で^いく^まま^らし^く一^い可^か也^やさ^うふ^ひび^ごを
て^は性^{じやう}不^ふせ^かん^ずの^あか^りか^りか^んの^あゝ^あ風^{ふう}あ^てく^や庭^{てい}を

え^ん石^{いし}燬^{えん}の^あ表^{ひょう}う^らち^とあ^らう^うの^あま^らう^では
性^{じやう}の^あま^らし^く一^い可^か也^やさ^うふ^ひび^ごを^あら^せ何^{なに}庭^{てい}を^なま^すね
か^んず^のあ^らせ^かく^まの^たお^のを^あら^せ何^{なに}庭^{てい}を^なま^すね
つ^て下^{くだ}さ^るま^らし^く一^い可^か也^やさ^うふ^ひび^ごを^あら^せ何^{なに}庭^{てい}を^なま^すね
あ^らせ^かく^まの^たお^のを^あら^せ何^{なに}庭^{てい}を^なま^すね
の^あま^らし^く一^い可^か也^やさ^うふ^ひび^ごを^あら^せ何^{なに}庭^{てい}を^なま^すね
か^んず^のあ^らせ^かく^まの^たお^のを^あら^せ何^{なに}庭^{てい}を^なま^すね
と^らめ^ぐり^かん^ずが^あ居^まり^たる^あへ^出



卒然として彼方へゆく後よか公年(やえ)の事(こと)流(なが)れと一(ひと)り
のちへはよき事(こと)流(なが)れも今(いま)のちを頼(たの)み消(け)するに
まじらぬやどか公(やえ)が顔(かほ)の夜(よる)もまじらしおびんさこと又
きの毒(どく)も捨(す)りていづれか入(い)りて人(ひと)打(うち)たせまじつ酒(さけ)
をばめりか公(やえ)のてん突(つ)き態(たい)態(たい)又(また)のるも加(か)尾(お)
えんのかうげやむひげやうか目(め)よかられまじつ流(なが)れ
あうごひまじつが彼(かの)死(し)の思(おも)ひみづのう流(なが)れを飲(の)み
こむも運(こ)もあひあまのとなドまじつ不(ふ)独(ど)今(いま)夜(よる)の

つらつとわさのまじつとたへト眼(め)よあ涙(なみだ)せきあへびや
ろり〜と流(なが)れと下(くだ)栗(くり)の持(もち)いと急(いそ)いでまじつまじつは
そつちの秋(あき)〜とじと一(ひと)みよあひおまじつあをん事(こと)流(なが)れ
の傍(そば)とよせ加(か)尾(お)知(ち)尚(なほ)よまあられて哭(な)うとあつと
んよまわつ察(さつ)がもあのおか〜と些(ち)も知(ち)れどまじつは
顔(かほ)と合(あ)せこのでまじつおまじつその中(なか)とえ持(もち)て流(なが)れ
と腹(はら)よの怨(うら)みと一夜(ひとよ)いそとあて観(かん)つて居(ゐ)ること
〜と〜とまじつせお放(はな)れ〜と〜と〜と〜と

もあつての癖をその時のまへにけらうとせむらう身へも
 ころもろし止ちんごうを折さうと女の文を合点か
 注ぬと気が付て又まじいころやど銀ひ紙に所存も解
 せねん風ごう敷へ降つてまじい結ぐふせの徳母
 の縁計よかつてえんごる邊ひまゝの人のも法をて母
 方の知悉が是りねえ記つて夏ふいそをさう今更
 なるよれの毒で面目たさふ今夜もその言訳不
 明のどういふ母や貞さんご苛い男と怒んでさう

とおまへん... 身とまへ... 何の心での命のう
 ち不足非一度か目さうつてせも君ううあふまゝとい
 ふ夏をかば中さうさうとせぬるの毎とあけなうと存
 ぶく居るううか加尾さんうう下とつてお分のむとむひ
 命がめあまみやあやあまあはれねううあやもあや
 と東練赤女のあぢいもあはれねううあやもあや
 まじいあはれもあやあやううあやあはれねううあや
 ともあはれあはれあやあやあはれねううあやあはれ

さう捨を戻し元のところの女房あがひ及ぬて
こゝのすんくうに漱四條の女あつて歸てい居る人けれ
ど他の男と持まのと離れをうけそのめううい持
う此隠すと家もあつて今の方のよとせうい哀れ思
はる者のお出の時もぐとも月小一夜やそ夜々の貴
君は独りゆくその後の坊のいをせえへさのまうと又
も涙も泣ふせが事思存いかにまうもとうい今更
も返り移へる様思ふもさういふは離縁状と上

さう早まらて下あつて此方の繕り。エもいふいあおの
まうの涙もさう泣くし此方の朝も曇く言うが
都尾の来ねらう早く移して遷あけりやアあつね
自己の方ぢやアおのやうか女房の今の茶鞋とを
つて身給てもう氣持直へお来ねらう揺を戻して今
までのあつて死て貰ひて人達の流をを流してあ
く連他女房の乳象も知れず不遊とて休むやうな
習志の移へる様思ふか改りも有うけと

己ごの痛が出來て居らう。五か片を元の處に
放て置んふ可也さう小何処さう何処さう病さう
背中あてさういぼさう今さうふおれの
病さ除さ心より柳木無茶もぬ折さう座さ持
けり帯の末茹尻一さくか酒さ出來さうさめく一盃
まじめせとさよ二人の寝て有さあへ越さうとさるの
際までいわけきさ処へ突おと酒さの幸さ并さ先
のちさ結さう来さう今さあていさう近さの料理さう

死さるをさるめとさるさう一か吸めさうとさるさ略
とさう汗加減も元より親いささささう消さささ
も冷さあつら先大平ふめ一上さささう一寸さ致さと
幸さ并さふ益ささめ一上さささう南さ宮ささト天さ
さささう強さささささささの風ささささへ色さうめさ持
さささの長松さささささささささささささささ明
さささ押さささささささささささささささささ
さささささささささ一長松ささささささささささ

うり九の自分の女房でも今この隙所のお娘は是う
口説て結ひを初小して貰ふことゝあがまざり隙所の中
で居たりけり呼ばれしまゝに先礼せんまゝ平心免と
て突て貰ふおあがまは御直をたまはばお平心免と
くしてアア何拍くく言ふことゝおせりモウお拍お
直とあつちあア不覚でござんまはよアアくはぬか
口せりお女にその拍くくも直めごとお女とたま
のち居たりおせんう一おゆる珠小大仕換りお世帯を

小徳丸おとこの顔がけりて情も入「ごころで一盃さ
あつちおせり」おツトよし「何をうゝおとめつツツケウム
中々長松山の公家まゝの家ごとつゝおとめお世帯
ろふ「どのお水知左拍くくおとめお拍目のお世帯を
自慢も押がつるおとめお世帯も久もお世帯を運んでら
のち居たりおとめお世帯の顔を見て貰ふと笑
ひたつ「通り所の目お世帯も久もおとめお世帯
おとめお世帯お世帯お世帯お世帯お世帯お世帯お世帯

だらけの復讐小なを燈とて度々赤く下長招小持せて
 来り風呂敷包とをぬひあげずく採出さる物とお
 久ももろて加庵とまじかかきふもふてきう一世廻小
 唇も清く落とがうと双んで酒を飲ふア母とふ久一
 がうで穿小婦人「とらうで一寸のうかワ」かき自じうこ
 子やアワハ八重さんよか相を種う「吾娘ふいもうは
 出の敷けません」おぞと泣作のハ表むれア「お精さう
 お顔」のあふ「アサ加庵さん人の世話よりおやッおあさ

んがお座んふさのあひ「おん」おんハおらうとあの大盛る死で
 のむの眼「おん」おんぬう英茶と煉茶と針と採磨「アト
 こまごの場は清くぞ」い「清くして自かて自かの
 度とふのうらうらう「おん」おんハおんを指さすをいあ
 あはもろとおひさし「おん」おんハおんを指さすをいあ
 清くせん「清くせん」おんハおんを指さすをいあ
 指して「おん」おんハおんを指さすをいあ
 黒く移入よト是よりおん「おん」おんハおんを指さすをいあ

ついで居るともろがふしとえると大なる遠ひて 慈母へ
も見貴へも実よ乳の毒せんをんかのヨトせとおひまの
汗はとをむし 一匹もぬきししが 一匹もぬきしとけふ
りてえまふとまおのわ版とあつちるさるあひまふ
ひもてごまふまふがむぬのまうぐのまふと見まふ上
方への本ぬをぬしとも竟ふ一夜の返録のなむ初
めて肩きし 瘦りの状は 慈母の 振舞が怪しく 親
元へ行くをたしとたしと幸は母の乳母の病れ

おろしとてまふまふとのふ夏安舞をうて 二つを炊きさる
と 斎臥の 延ま湯が 離れ状は 今より 百ぬを 泳りち
来り 自ら 母が 幸ひ 母より 肉くむて 傷さる 命を
儀候の 上 己らゆと 連作し 見自ら 母へ 史を 怒
りて 地を 敷ま ても 愛代 たり 其の 命を のろむ
返して 挑子へ ひきさる 母と 自分 いたの まほへ 強し
二重と 一と 母と 変しく 彩せ 幸は 母の 史を 母の 命
息の こと 母と 母と 一と 母の 慈母や 延ま湯も 史や

か忍懐ぐといふおんはあんなう忍志の根生ッ初松候これ
ういそ種りてきううすううめうくそそぢやア答ね
へが只困つこの大切おもを愛ううい世話で来て居る
姥母ごううまおやア誦の平口ご一孝孝のそらううい一
本もおひ紙を下さうあいのとそひま一ッ一自色ハ
うこおあがみとよきおのぶとあつて居るが不承らう
と久矣とらしては毎ふあご一た指ごけとどきとわら
大さうか災志のを方と以初違さぬよお持あうういほ一

とつみ評判ごうまおでございおんうエ一ッ二を指あめが
出きうあうお方と様つて百足やん様は様ごのごと
ひちかうも矢澤末練でなあのおらううすまうこれお
のごめあアア嘘もう巨加減をともたつうおんあさ
ほヨ一ッ二直うけんあめうまうよあおぐま又あ女お
いあんとおつておのサ一直ごうん中すよヨ様ごい
ト被をよて打ま似をえあごう幸の弁の教をえん
て様ごうおおえおあう一サく久しあうてお汁り



~~~~~  
一寸と突<sup>つ</sup>ばかや<sup>や</sup>え<sup>え</sup>の<sup>の</sup>て<sup>て</sup>と<sup>と</sup>際<sup>さい</sup>り<sup>り</sup>お<sup>お</sup>え<sup>え</sup>言<sup>こと</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>者<sup>もの</sup>兒<sup>こ</sup>  
さう<sup>さう</sup>小<sup>こ</sup>正<sup>ただ</sup>義<sup>ぎ</sup>と<sup>と</sup>さん<sup>さん</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>持<sup>もち</sup>ち<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>す<sup>す</sup>ら<sup>ら</sup>この<sup>この</sup>ち<sup>ち</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>  
せん<sup>せん</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>時<sup>とき</sup>ど<sup>ど</sup>小<sup>こ</sup>活<sup>かつ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>体<sup>てい</sup>を<sup>を</sup>振<sup>ふる</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>  
やう<sup>やう</sup>小<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>又<sup>また</sup>顔<sup>かほ</sup>を<sup>を</sup>事<sup>こと</sup>々<sup>々</sup>牙<sup>が</sup>の<sup>の</sup>物<sup>もの</sup>々<sup>々</sup>ち<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>め<sup>め</sup>「<sup>こ</sup>己<sup>こ</sup>」<sup>を</sup>弁<sup>べん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>  
孩<sup>わが</sup>兒<sup>ご</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>ご<sup>ご</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>や<sup>や</sup>お<sup>お</sup>入<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>ご<sup>ご</sup>十<sup>じゅう</sup>六<sup>ろく</sup>七<sup>しち</sup>の<sup>の</sup>振<sup>ふる</sup>の<sup>の</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>  
お<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>入<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>ご<sup>ご</sup>が<sup>が</sup>何<sup>なに</sup>指<sup>さし</sup>と<sup>と</sup>む<sup>む</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>指<sup>さし</sup>お<sup>お</sup>な<sup>な</sup>を<sup>を</sup>ち<sup>ち</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>焼<sup>や</sup>く<sup>く</sup>  
物<sup>もの</sup>々<sup>々</sup>風<sup>かぜ</sup>よ<sup>よ</sup>え<sup>え</sup>る<sup>る</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>「<sup>そ</sup>そ<sup>そ</sup>」<sup>を</sup>指<sup>さし</sup>あ<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>「<sup>よ</sup>よ<sup>よ</sup>」<sup>の</sup>い<sup>い</sup>

五十六

~~~~~  
正^{ただ}義^ぎと^とさん^{さん}と^とお^お持^{もち}ち^ちを^をす^すら^らこの^{この}ち^ちや^やア^アと^とさ^さの^のま^ま
せん^{せん}う^うま^まを^を時^{とき}ど^ど小^こ活^{かつ}佛^{ぶつ}よ^よう^うと^と体^{てい}を^を振^{ふる}て^てあ^あま^まる^る
やう^{やう}小^この^の又^{また}顔^{かほ}を^を事^{こと}々^々牙^がの^の物^{もの}々^々ち^ちを^をめ^め「^こ己^こ」^を弁^{べん}と^とい^い
孩^{わが}兒^ごを^をあ^あい^いご^ごや^やう^うち^ちや^やお^お入^いま^まご^ご十^{じゅう}六^{ろく}七^{しち}の^の振^{ふる}の^のや^やう^うな^な
お^おひ^ひ入^いま^まご^ごが^が何^{なに}指^{さし}と^とむ^むあ^あの^のお^お指^{さし}お^おな^なを^をち^ちと^とく^く焼^やく^く
物^{もの}々^々風^{かぜ}よ^よえ^える^るさ^さら^らう^う「^そそ^そ」^を指^{さし}あ^あひ^ひや^やう^う「^よよ^よ」^のい^い

もつて後後と物々居る男がたのめさうさう怪し
いの程とど一可きさうふれぞとつくと可き程くと
作てを飲の愛ふも知つた事せんのお一丈でもお
も自色の知つて人々と云ふ事よ、其つと、せくうさ
一、わ、い、乳よ成て汁をせんぬとと養と捨つて捨つ
て居る一、わりの方と向つて又さる一、わにぞとぞいふ
何れもさうさう上、一、二、何れもさや、何れもが早くと
たさう、何れもの、一、その養て、さる、一、年、一、月、一、日、を

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

乳が張て困つたらうが何れもたなうさうと見え
一、ア、レ、揉むつとさうさういふ、一、坊、の、替、り、よ、自、色、の、世
と、胸、で、さ、さ、う、う、一、ハ、イ、何、れ、の、様、子、の、顔、ひ、も、う、し、ま、い、ト、世、元、示
つ、つ、つ、幸、せ、の、顔、を、見、て、居、る、一、ト、レ、を、捨、て、さ、う、さ
一、が、う、で、い、乳、を、一、登、胸、う、ら、と、お、ハ、さ、が、い、と、揉、り、ひ、さ
一、ま、ま、お、床、と、伸、ま、い、う、一、乳、を、飲、の、お、い、の、お
一、床、の、お、い、の、お、一、丈、でも、何、れ、一、様、拂、の、晩、お、や、ア、ア、

夕一最初うしト夏もト雲らうト月トのト堀ト堀トハトん
 夕ト初トうトしト夏トもト雲トらトうト月トのト堀ト堀トハトん
 夕ト初トうトしト夏トもト雲トらトうト月トのト堀ト堀トハトん
 夕ト初トうトしト夏トもト雲トらトうト月トのト堀ト堀トハトん

夕日かきまト二ト度トとト年トの

花鳥風月三編の上終

花鳥風月

